

第32回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

儒教の日本的展開

今回学ぶこと

儒教を中心に江戸時代の思想について学ぶ。江戸幕府は朱子学というものを広めようとしたが、それに対して、朱子学を批判した伊藤仁斎・荻生徂徠などの思想が生まれた。さらには儒教そのものを批判し、日本人本来の生き方を説いた国学も登場した。また商人や農民の思想や、幕末における変革の思想などについても学ぶ。



講師

田中久文

■ 日本的儒教の成立「伊藤仁斎と荻生徂徠」 ■

江戸幕府は、儒教、特に朱子学を重んじた。朱子学は宇宙全体にも人間の心にも、一つの「理」というものが貫いていると考えた。そして、人間の心に「理」を磨きだすためには、感情や欲望を抑えなければならないとした。また社会全体に「理」が実現すれば、秩序ある社会となると考えた。幕府に重んじられた林羅山は、「上下定分の理」（上下の身分秩序は運命的に定まった分によるもので不変の「理」である）というものを説いた。

しかし、こうした朱子学を批判する儒学者たちが続々と登場した。伊藤仁斎は、朱子学が感情や欲望を抑えるべきだとしたことを批判し、儒教の根本精神は、愛としての「仁」であると説いた。そして「仁」を実現するには、「忠」（まごころ）と「信」（人への信頼）を日々実践すべきだと説いた。

また、荻生徂徠は、宇宙の「理」を説くような朱子学を現実離れしたものとして批判し、豊かで平和な社会を実現するために「先王」（中国古代の理想的な王）が作った具体的な政治制度・社会制度を実現することが本来の儒教であるとした。

■ 国学の誕生 ■

江戸時代には、朱子学を批判するばかりでなく、さらには儒教全体を批判する国学も登場してくる。国学の大成者本居宣長は、儒教というものが他国の中国で生まれたものに過ぎないとし、日本人であるならば、日本固有の教えを学ぶべきだと説いた。そして、

そうしたものは『源氏物語』や『古事記』など日本の古典に表されていると考えた。

宣長によれば、『源氏物語』は「もののあはれ」というものを説いたものだという。それは、朱子学の説くように感情や欲望を抑圧するのではなく、うれしいことでも悲しいことでも、感動を通して物事の本質に触れようとすることであるという。さらにその後、宣長は『古事記』を研究し、そこに描かれている神々のおおらかな生き方こそ、日本人が理想とすべきものだと言った。

■ 商人・農民の思想とばく幕末の思想 ■

石田梅岩^{いしだ ばいがん}は、商人の生き方を説く「心学」というものを創始した。そこでは商人に必要な具体的な心構えとして、「正直」と「儉約」が説かれている。

また安藤昌益^{あんどう しょうえき}は、身分制社会による「法世」^{ほうせい}を批判し、すべての人間が直接田畑を耕す平等な「自然世」^{しぜんせい}を理想とした。さらに農村の復興に尽力した二宮尊徳^{にのみや さんとく}は、人間の人為的な働きとしての「人道」^{じんどう}と、天地のおのずからな働きとしての「天道」^{てんどう}とがあいまって農業は成り立つのだとして、天の恵みを受けながらも、農民の人為的な努力の必要性を説いた。

幕末になると、社会そのものを変革していかなければならないという思想も起こってくる。吉田松陰^{よしだ しょういん}は、「尊皇攘夷」の主張のもとに、幕府を倒して身分差別や藩ごとの区別を撤廃し、天皇のもとに国民全体が一体となれるような新たな社会を構想した。

◆ コラム ◆

本居宣長によれば、「もののあはれ」というものは、本来は喜怒哀楽すべての経験から起こる感情だということです。しかし、やがて「悲しみ」だけを表す言葉となります。それは、「悲しみ」の感情が、人間の感情のなかで最も深いものだからだと宣長はいいます。そして、そうした「悲しみ」の感情によってこそ、人間は世界の本当の姿に触れることができるということです。たしかに、私たちは楽しいことやうれしいことよりも、悲しいことによって成長することのほうが多いのではないのでしょうか。